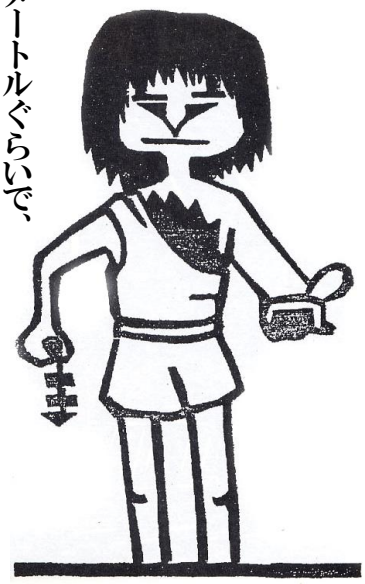
志文の民話

志文民話は秋山寛氏が執筆し、第１集から第３集まで発刊されていたものが、「いわみざわの民話」に掲載されていましたが、その独自性を考慮し「志文民話」として再掲いたしました。

なお、若干の校正と参考資料等を追記しています。

裸乞食物語



現在の万景閣の下の方に、昔は坊主山と呼んで、ちょうどお椀をふせたような形の山がありました。標高六十メートルぐらいで、この中腹に縄文文化期の遺跡があるのが、昭和三十五年ごろ発見されました。山のふもとから泥炭層があるのを見ると、この地点は海水域に突出した岬で、四、五千年前の先住民に好適な居住地であったことが想像されます。今は山の南斜面が道路建設や宅地造成の盛土用にすっかり削り取られて、いにしえの面影はありません。

いつごろからか、この山に一人の大男の乞食が住みつきました。

一年中裸で、ふんどし代わりに何かの動物の皮を腰廻りに当てているだけでターザンスタイルです。玄関からスーッと入ってきてかんづめの空缶を差し出します。ご飯やダンゴを貰ってうまそうに食べると、また何も言わずに出て行きます。最初のうちは体も大きいし寒中でもはだしで来るものですから気味悪くみんな敬遠していました。

けれども絶対に人に害を与えたり物を盗んだりせず、何を話しかけてもニコニコ笑っているのです。

むかし、この坊主山の裏側に競馬場がありました。開拓者として内地から移住した時は、道庁から一戸に一頭の馬が貸与されたものですからたくさんの馬が飼われています。たいして娯楽の無かった頃のこと、馬の競走を楽しんで日頃の疲れを忘れたものです。年々盛況になり、その日を指折り数えて待つようになりました。

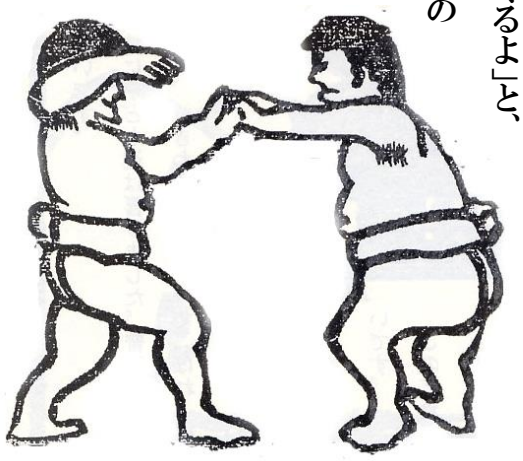
ある年の競馬が前々日から降り続いた雨で馬場がぬかり、開催不可能になりました。しかし、近隣の村々からも三々五々集まって来てしまったのです。競馬は後日することにして、当日は小さな場所で用が足りる角力をすることに急に話がまとまり、早速土俵が用意されました。子どもも女も老人たちも大勢集まって、名勝負には拍手喝采をおくります。見物人の中にかの裸の乞食が来ていたのです。

裸の力士の中に混じっていたものですから気づくのがおくれました。誰かが馬の腹帯をまわしにして巻きつけ、早速土俵に引きあげました。さすが六尺近い体格の持ち主だけに、最初は圧倒的な強さを見せて何人も押し出してしまいました。そのうち彼の弱点が見抜かれました。投げ技ができないのです。下にもぐり込んでまわしを引けば、なんなく投げることができるものですからみんな大笑いです。

特に子どもたちは喜びました。駄々をこねたり普段家で泣きわめ

くと決まって「ほれ、裸の乞食がくるよ」と、恐い代名詞でおどかされていたものですから、日頃のうっぷんがすっかり晴れた思いです。

この乞食のことをくわしくは誰も知りません。顔のほりの深さ、ふさふさとのびた胸毛からみて、アイヌの末裔であることが想像されました。



そして、彼の口から言語が出ないのは唖ではなく、和人語が話せないからだともいわれました。更にこの想像を決定づけたのは彼の住居の型です。四本のえぞ松の立木を利用し擂鉢型の低い屋根と三坪程の壁を全部笹の葉で葺いてあったからです。人のうわさによると、旭川地方のアイヌのコタンから幌内炭鉱へ連れてこられたが、元来のノロマ、採掘の仕事に耐えられず、飯場で入浴中に逃げて来たのではないかという説が一番信憑性があるように思えました。

それからしばらくして、彼の姿を見かけなくなりました。

大きな体をゆすりゆすり歩く動作に、角力大会の愛嬌振りを見い出していただけに淋しい気がするのです。

彼のことをみんなが忘れようとしている矢先、第一次世界大戦が始まったものですから、役場の方で兵隊として徴用したのではないかとのうわさもたちましたが、さだかではありません。

《参考》

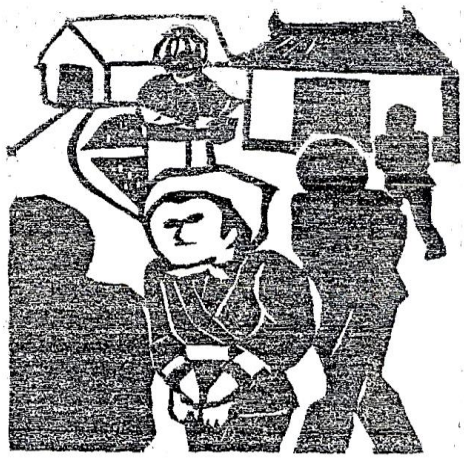
・万景閣は昭和四十六年（一九七一年）、『万景閣ラドン温泉』として開業、その後、『岩見沢観光ホテル』として営業していましたが、平成十年（一九九八年）に休業、同十八年（二〇〇六年）に解体して、現在はさら地になっています。

・現在、北海道グリーンランド遊園地の大観覧車の建っている辺りに、坊主山と呼ばれる小山がありました。しかし、昭和五十年代から始まった高速道路『道央自動車道』建設のための土取り場として山全体が削り取られ、完全に姿を消してしまいました。

・高速道路は、岩見沢インターチェンジの完成と共に、昭和五十八年（一九八三年）に開通しましたが、その間、坊主山のある一帯は、『冷水遺跡』として、縄文時代早期から後期にかけての大変貴重な先住民族の居住地跡であることが判り、調査をして数々の重要な遺物が発掘されました。その調査で発掘された土器や石器類の多くは、岩見沢郷土科学館に展示してあります。

茶店物語

志文の地名は、アイヌ語のシュプンベツ(うぐいのいる川)からだといわれております。幌向川をはじめ、この付近の細流にうぐいが多数生息していたのでしょう。この志文は、一辺がほぼ二キロ程の正三角形の形で区画されており、昔は街の真中を北南に走る夕張道路と東西に通じる万字道路が、今でいう一級国道として交通の要路となっていました。夕張通りは岩見沢の元町を起点とし神社をこえて教育大学、霊園、そして直線に耕成神社の方向へ、一方の万字道路は、のちに軽便馬車鉄道が敷かれました。



この二本の路が交差する十字路付近は人家も集まり、終日人馬の往来もはげしく、かなりのにぎわいを見せたものです。茶店も三軒たち並び、馬車追いたちのかっこうな一服の場所でした。四尺も五尺もある丸太を満載したトロッコを、何十頭もの馬が列をなして引く様子は壮観なものでした。十年ほどそんなにぎわいのあった街道も、夕張道路は一キロ程西の現在地に移動し、また万字線は鉄道が敷設されて志文と万字間に列車が走るようになると、とたんに交通も途絶えてしまい一軒残った茶店も、二人の老夫婦が雑貨品やタバコを売りながら細々とやっておりました。

ある冬のとても凍れる夕方です。ドンドンと表の戸をたたく音がします。あいにくじいさんは風邪で早く店をしまった後だったので、ばあさんが出て行くと「渡場の宿までなんぼあるかね」と戸越しに男の太い声がします。戸を開けると赤い囚人服を着た十数名の一行です。

「もうすぐだ。一里までないからのう……」老婆の声はふるえておりました。「ありがとう」、看守の声が終わらないうちに一団は動きだしました。ガチャガチャ手錠の鎖の音が異様にひびきます。

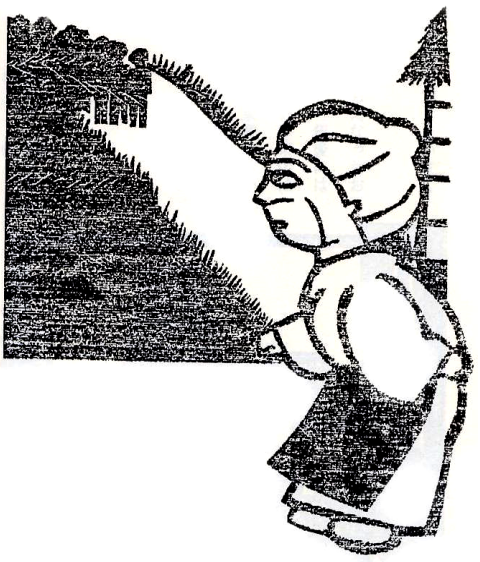
ばあさんは、しばらく戸を閉めず男たちの後姿を見えなくなるまで見送っていました。静寂の中に小さくシャリシャリシャリ……とツマゴのひげの先に、こおりついた雪球のぶつかり合う音がこだまして聞こえるのです。これは万字炭鉱の開坑に、市来知集治監から囚人を連れて行くところだったのです。その夜からばあさんは急に変な行動をするようになりました。頭がおかしくなったのです。そして、「あの中におらの息子がおった……」とくり返して言うのです。

一人息子は徴兵検査前に、すでに結核で亡くなっていたのですが、夕暮の黄金色の中に映った一人の囚人が死んだ息子の顔と瓜二つだっ

たのです。ばあさんが岩見沢の病院から抜け出したのは、雪解けが急に進み、黒土の匂いがかげろうとなっている頃でした。

ばあさんは、とうとう家の近くの増水した幌向川へ身をなげてしまいました。

一人ぼっちになったじいさんも一年後には亡くなり、一軒の茶店は交通の衰退を象徴するかのように、長い間無人の廃墟となっていたのです。



馬喰物語

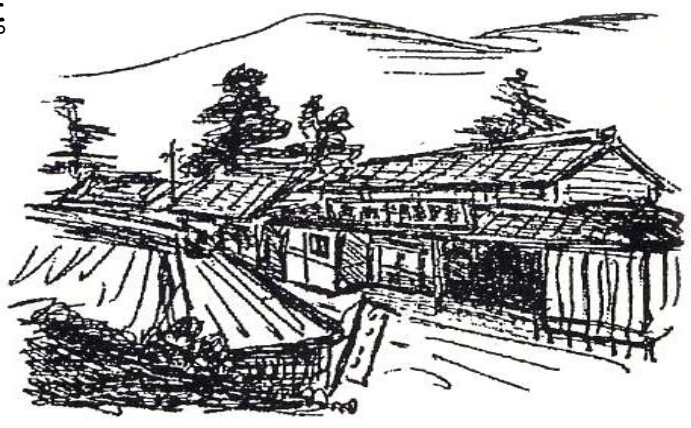
馬は北海道の開拓とは切っても切りはなすことのできない重要な役目をもっていました。農家一戸に最低一頭の馬が飼われており、家族同様大事にされていました。冬は材木運び、春は木の切株の堀り上げやプラウを引いての耕耘、夏は除草作業や川から砂利を上げて道路に敷いたり、秋は収穫の仕事と一年中重労働ですから、思いがけない事故で使えなくなったり、また、十歳を過ぎると体力がめっきり衰えます。そんな時は代わりの馬を見つけなければなりません。

自分でさがす方法もありますが、たいていは馬売買業者のところへ相談に行きます。手持ちの馬を売ってくれたり、あちこちへ出かけて適当な馬をさがしてくれます。この商売を『馬喰』と呼んでいました。

幌向川をはさんで向かいは栗沢、こちらは岩見沢。この往来に舟を使った渡場は交通の関所であり、人の出入りの激しい繁華街でした。

この街はずれに馬宿牛馬売買業の看板をかけた龍次郎という馬喰がおりました。若い頃やくざの仲間にあり物騒なことを切り抜けてきただけあって、それなりの風格をもち、みんなから「龍次郎あにい」と呼ばれていました。

この細君の菊乃がまた、この界わいの別嬪で、うわさによると道南の料理屋から身受けして一緒になり、この地に流れついたということですが、その女傑振りもなかなか堂に入っており、たてひざで長ギセルをくわえながら何人もの馬丁をあごで使っていました。



馬市があれば夫婦揃って出向いてセリに加わり何頭もの馬を連れて

帰ります。馬商の話にも龍次郎より先になって相手になります。

ある日、かって龍次郎がわらじをぬいだ㊓一家の子分たちが、「休ませてくれい」と大挙して入ってきました。長ドスを持ち血相を変えたその様子は唯事ならぬよう。こもごも話した内容は、昨夜岩見沢市街のたちばな屋という芝居小屋で、㊓組の一人が対立関係にあった夕張の柳田一家の子分に袋だたきにあった、その仕かえしに山越えをして、夕張へなぐり込みをかけるとのことでした。

「それじゃ万字まで馬で送るべ」

菊乃はコップに酒をつぎながら馬丁たちに、「馬を用意しろ」と命令しました。㊓のやくざたちが裸馬にまたがって口々に「あねさん世話になったなあー」とひづめの音をひびかせて出発しました。

「みんな帰ってこいよー」

菊乃も龍次郎も祈るような気持ちで見送ったということでした。

辻村農場物語

明治二十二年、市来知集治監の囚人の手により岩見沢駅より、夕張炭山に通じる幌向川までの道路がつけられ、志文原野開発の端緒が開かれたのです。二十三年宮本銀松家他二家族が元組に移住し、原始林の伐木に着手しました。志文部落最初の移住者でした。ついで二十五年に辻村直四郎が百余町歩の開墾を志し入植しました。

部落名を在来アイヌ語のシュウプンペツ（うぐいのいる川）を保存する意味から志文と命名しました。この志文の二字についてはこんな話があります。直四郎が、「俺は土に志したが子どもに一人ぐらい文に志すものもいて欲しい」との願いが込められていたとのことです。

長女の辻村もと子が短歌をたしなんだ母（梅路）、叔父の文人中村星湖の血を受けて文才を発揮している時でもありました……。

第一回の樋口一葉賞を受けた小説“馬追原野”は、父直四郎の開拓日誌を基にして、その馬追の開拓を果たし翌年幌向川のほとり（現在地）に移るところで終わっています。四十二歳の生涯だっただけに、続編の志文開拓の様子が日の目を見なかったのが残念です。

今年の雪解けは早く、三月の終わりにはどこの道もすっかり乾いてい

たが、この夕張道路は粘土質のために、四月になってもひどくぬかっていた。岩見沢から小一里もきた所であろう。道はやっと目先のきかぬ樹林地を出て明るい小高い草原地にかかった。やや斜めに傾いた春の陽がさんさんと道の右手に広がる未開の石狩平野にあふれていた。

その遠く空に連なるあたりは、さっき汽車で迂回してきた江別あたりであろうか、石狩川の水が湖面のように白く光っていた。

幌向川にかかった皮もはいでいない釣橋のたもとに掘立小屋同然な茶店があった……。

辻村一家が原始さながらの生活にもひるまず、開墾を続けていたがしだいに小作人として入植するものも増えてきます。うっそうと茂った大森林が次から次へ倒されてゆきます。直四郎は消えゆく大自然を保存したいと思いました。住宅のある一町五反歩をそのままの形で残すことにしました。また、小作人達にも由緒ある樹木は許可なく切らないようにしたのです。ですから、樹齢何百年の木がぽつんと畑に立っていると、「ああ、あのニレは誰の家だ」とわかります。

昔はこの樹木を目じるしにして歩いたともいわれ、道路をつけてもわざわざ廻り道をして木を残しました。五年後には三十数戸の小作人によって最初希望した百余町歩の開拓が見事になされ、立派な畑として生まれ変わりました。辻村農場として完成したのです。

与作は何年かおくれて入植した部類です。まだみんなとの協調がうまくいきません。彼は時たま「俺はならず者のはてだ」とうそぶいて大きい事をいったり荒い気性を態度に出したりします。

たいていの小作人たちは、地主である直四郎をみると何間も手前から深々と頭を下げて、「旦那さま、お早うございます。今日はよい天気で」と、もみ手をして挨拶をしますが、与作にはそんな卑屈なところがまるでありません。人は皆平等と思っています。

与作の畑に一本のナラの木が残っています。直径四、五尺もある見事なものですから切ることが許可されません。しかし、作業にも邪魔になりますし、陽かげになるので作物はよい生育をしません。いつか折りあれば切ってしまおうと思っていました。

今日は町会議員の旦那は札幌に出向いて留守です。頃合いよしと与作は大きな鋸で引き始めました。

何せ大人が四人程手をつないでようやくとどくような大木ですか

ら切るのにも時間がかかります。

それに、普通ならちょうなで切口をけずるのですが、そのかん高い響きでたちまちばれてしまうものですから、鋸だけでやっていますと木の重みでどうもうまくいきません。あせればあせるほど時間ばかりたっていきます。そのうち用事を早くすませた直四郎が帰ってきました。早速、農場見回りに馬でやってきますと鋸の音が聞こえます。

「こら与作、その木は駄目だっちゅうに」

与作はもう度胸を決めました。

「形あるものは必ずこわれる。年とった木は必ず倒れる」

口の中でぶつぶついいつつ手を止めません。

旦那が馬からおりて近づいてきます。

「旦那！　近づいたらあぶないどう、そっちへ向かってひっくり返るで」

与作はありったけの声で叫びました。旦那はびくっと立ち止まりましたがそんなに急に倒れそうにもありません。

そのうち旦那の顔がくずれました。

「なんだ与作。ちょうなも使わずたいそうしおって。なんと、お前としたもんが……」

こう言い終わると「ハッハッハ」と大声で笑いだしました。与作も手を止めて「ヘッヘッヘ」と額の汗をこぶしでぬぐいてれ笑いです。

静かに夕暮れがせまっていました。

オヤジ（熊）物語

北海道の開発が国の急務となり、開拓使を設置して内地からの移住には特別な保護政策がとられるようになりました。

船賃は無償、陸路六里以内の運賃もただ、食費、食糧も貸与され、返納は現物または現金で二十年賦、七年間は無利子、三間に五間の掘立住宅が与えられるなどの方法で移民を奨励したのです。

樹海と表現されるように、樹とクマ笹におおわれたこの地方も人々が徐々に移り住んで開拓されるようになりました。

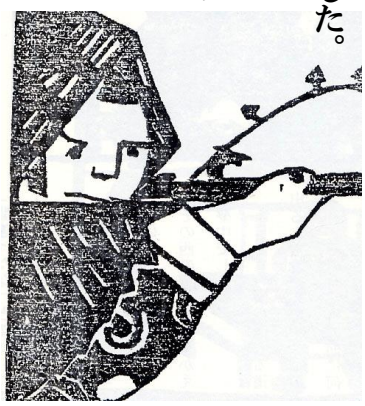
楡、たも、えんじゅの木が十間程もそびえ立っております。

直径四、五尺もの大木が続々と倒され、山に盛り上げ火をつけ燃やします。切り株と切り株の間を耕して、いもやとうきび、そばなどを播くのです。入植後三年以内に三町歩の開墾が義務づけられていましたから、不眠不休の労働が続き、冬の深雪の中も伐木に精をだしました。人家が多くなっても野生の動物は遠慮なく闊歩し、きつね、兎、鹿などが農作物を食い荒らすこともあり、時たま『オヤジ』といって一番おそれている熊が姿を現してびっくりさせられます。

ある秋の満月も近い夜中、馬屋の方で「バリーン」と板の割れる音が

するので、家人がおそるおそる窓のむしろを上げて、小とぼしをかざして見ると、一頭の熊がその一げきで倒した馬の前足を肩にかけ、後足を引きずって逃げていく場景にあぜんとしたともいわれています。

日常の食物は、麦、いも、かぼちゃ、とうきびなどで、幸いにも春は沢山のニシンがとれ、秋には鮭が川に上り、野山には兎が繁殖して栄養源にはこと欠かなかったのです。だから、婦人たちは大根とキャベツの塩漬に、コウジとニシンをあしらったニシン漬、タラと大根を煮込んだ三平汁、鮭と野菜を組みあわせた鍋料理に腕をふるったものです。春のまきつけ、秋のとり入れなどの部分的な農作業は、大勢の人の共同で片付けることが多かったし、家を建てる、井戸を掘る、排水溝を作るといったようなことも、同郷の者あるいは親せきの者が集まって、お互いに手伝い合ったものでした。そんな時のごちそうは、きまって塩で固めた鮭と手打ちそばでした。



今日は、久五郎のいも掘りの最後です。

手伝いにきた大勢が喜々としてこまめに動いています。誰もが夜のごちそうに兎が食べられると内心楽しみにしていたからです。久五郎はこの辺一番の鉄砲の名人で、来客があると必ず、「ちょっと獲ってくるで」と言って、鉄砲をかついで出ていくと、小一時間もしないうちに、腰に獲物をぶら下げて帰ってくるからです。その腕前は、かなり広範囲に広まっていましたから、「オヤジが出た」と言えば、必ず何人かの猟師を指導して熊撃ちに向かいました。ですから、彼は仕事の合間をみてはかなり高価な火薬を札幌の薬種屋へ馬で買いにでかけたり、鉛を自分で溶かして鋳型にはめて実弾作りをするのでした。

夕暮作業の終わりも近づいた頃、案の定久五郎は愛銃をさすりながら山の方へ向かいました。彼の腕もさることながら兎の習性と地理をよくわきまえているものですから、たちまち見つかってしまいます。

一匹を仕止めて、「さあ帰ろう、みんな待ちくたびれているかもしれん……」そう思いながら引き返そうとしました。

けれど秋の落日はつるべ落としです。高い木に囲まれて急にまっ暗になり、方角を見失って反対の方へ歩いて行ったのです。

「間違ったな」と気づいた時はかなり歩いていました。かすかに樹林の間から茜色が一線、低く糸を張ったようにちらつきました。

その西の方へ向きをかえると夢中でした。ようやく家へ通じる道に出るともう安心です。とその時、目の前に何か大きな黒い固まりが動いたようでした。「熊だ！」肩から鉄砲を取る瞬間、兎の血の匂いに向かって突進してきた黒い物体のその丸太棒のような前足が久五郎の頭の上に振りおろされました。

「ダーン！」と鉄砲の音が、闇の静寂を引きさくように響きわたり

ました。熊は一直線に茂みの中へ姿を消しましたが、久五郎はそのまま気を失ってしまいました。家で待っていた大勢の者が、かすかに聞こえた鉄砲の音と、少し時間がおそいのを心配していろりの中から取り出した、たいまつがわりの薪を持って探しにでかけました。幸い命は取りとめましたが、鋭利な爪で頭を斜めにえぐられたものですからかなりの重傷でした。

一方、弾を撃ち込められたオヤジは、点々と笹の葉に血を残し逃げ続けていましたが、手負の熊の狂暴性をよく知っている猟師たちは、より抜きを近隣から集め追い続けました。オヤジは三日目にもう精魂つきはて谷間にうずくまっているのを発見され、息の根を止められてしまいました。

《参考》

・久五郎は私(秋山寛)の祖父です。

熊との出会いは、現在の家から二〇〇メートル位離れたところです。その時の傷が原因で半年後に亡くなりました。

神社物語

金子という名称は、元貴族院議員金子元三郎の所有地であったからで、幌向川、幾春別川にはさまれた低位湿地帯で、ゼンマイカブ、ホロムイスゲの針金泥炭が厚い層をなし、天気が長く続いても膝までぬかる状態で、道路には・・・・スリッパといって雑木や割枝を敷きつめて通行しなければなりませんでした。作物の生育も悪く、なかなかよい収穫をあげることができません。この土質に一番適したものは稲であることに着目した小作人たちが知恵をしぼった結論は、幌向川に水源を求め造田に踏み切ることでした。また、将来の農業経営の合理化は、畜産を加味することの重要さも考え、冷水の官林四十万坪を牧野地として借りることに成功したのです。この辺りを今でも金子の沢と呼んでいます。

馬を放し逃げない為の囲いは、ヤチダモの直径一尺二、三寸のものを六尺余りに切り、切り口に斧で一直線に割口をあけ、これにイタ

ヤの木で造った矢を何本も次から次にかませていくとよく割れて立派な杭ができます。コクワの乾いたつるで三、四寸の横棒をしばりつけると頑丈な柵ができ上がります。この放牧地の入口の小高い処に稲荷の大明神をお祀りした神社がありました。

むかし、前人未踏の地に身命を賭して大自然を開拓した人々が旺盛な精神力を必要とし、その精神の支柱として神に信仰を求めてあちらこちらに社が設けられ鎮守の祈願をしたのは当然でしょう。

この祠もきっと内地を出発する際に分霊をもらい受けた誰かがお祀りしたものだったのでしょうが、開墾に失敗してどこかへ行ったのか、人家の無い極めて淋しいところに、ぽつんと小さな四角の箱をふせたようにたたずんでいました。

その頃志文の市街は、駅の設置にともなって郵便局、巡査駐在所が置かれ、宿屋、料理屋、芝居小屋が軒を並べ、開業医が往来し、商店はもちろん、かじ屋、蹄鉄屋、家畜医と活気に満ちた街を形成していました。この市街のはずれにやはり神社があり、天照大神を祀っていました。街の隆盛と開拓者の落ち着きから社殿の改築をすることになりました。そこで誰いうとなく、この際、冷水の山の神社もにぎやかな所へ統合しようとの話がまとまったのです。

神社の横に宮守さんが住んでいました。みんなは「ひげ」あるいは「ひげ守」と、かげで呼ぶほど真白なひげを円を形造るように、目の方まではね上げてそれはみごとなものです。そして、うす空色の袴に似せた袖なしにだぶだぶのモンペをはいて、いつもステッキを離したことがありません。たいてい遊び場や道具の無い子どもたちは、この広い境内の木に登ったり、角力をとったり、かくれんぼうをする恰好の場所でしたが、この宮守の人間離れした風貌と威厳のこもった態度に圧倒されて、子どもたちはこの姿を見つけると、おこられもしないのに雲散霧消して木のかげにかくれます。見えなくなると、また出てきて遊ぶといったあんばいでした。

いよいよ新しい社殿が完成し今日は冷水の神社のご神体を運んでくる日です。学校帰りの一団が遠くに馬に乗ってくる宮守の姿を見つけました。「ひげを驚かせてやろう」子どもたちの悪知恵は、日頃の近づきがたいうっぷんを晴らすよいチャンスです。話がすぐにまとまり道路わきの背丈以上のイタドリの中に身を沈めました。

それとも知らない宮守は、例のカイゼルひげを秋風になびかせながら天を向いて近づいて来ます。子どもたちは一斉に「わあー」と大声

をあげて道路にとびだしました。馬は鼻を大きく開き、ケツを高く上げると一足とびに走り出しました。

宮守は尻から仰向けに反対側の笹やぶの中にほうり出されたのはいうまでもありません。

「こらっー。餓鬼ども、はんかくさいまねをするなー。神さんのバチ当たるべー」

子どもたちの耳にきんきん響きましたが、みんな手をたたいて逃げて行きました。

「ハッハッハッ、ワッハッハハ」大笑いして起き上がった宮守の手にしっかりとご神体の風呂敷づつみがにぎられていました。

「なかなか、わらべ等元気があるわい」と口の中でつぶやくと、もう一度「ワッハッハハ」と紫紺の空へ刺さるような声を発しましたが、もう誰の耳にも届きませんでした。

《参考》

・その後、金子神社も志文神社に統合し、祭礼も一緒に行っていましたが、金子には出身県から伝承された郷土芸能『獅子舞』を保存する意味からも、神社独立の気運が再び起こり、現在地に祀られることになりました。

アカダモと白蛇

それはずいぶん昔のこと。

夕べからの風がビュンビュン吹いていました。時々草も木も立っていられないほど強く吹き荒れます。

その台風の中を一匹の白蛇が山奥へ逃げようとしています。山里の部落をふりかえりながら……。あれは、死期のせまったあえぎなのでしょうか。吐く息にも力がありません。片方の開いた目から、きらりと光るものを浮かべ、また動いて行きます。

昔、坊主山のてっぺんに一本のアカダモの木が天を突き抜くように立っておりました。何百年も生きてきた老樹の貫録は、威厳に満ちており、いつも里の様子をじっと見つめております。

このアカダモの木に一匹の白蛇が住みつくようになりました。もともとこの蛇は、その肌の白さ故に仲間から相手にもされず、孤独に生きてきましたが、「死ぬまでに一度広々とした野原を散策したいものだ」と山奥からやって来ましたが、寄る年波に勝てずここにたどり着くと、もう里の原っぱに行くのが大儀になり、アカダモの根元の祠を

寝ぐらと決めました。ふだんは、出歩くこともなく、めったに人目にふれることもありませんが、ある日あまりの陽気さに外に出て長々と寝そべって全身にやわらかい陽ざしを当てていました。その時にふき取りにやって来た定三は、その白蛇につまづいてしまいました。びっくり仰天、持っていた鎌で頭めがけて切りつけると、ほうほうのていで逃げ帰りました。

菜の花が咲き、麦の穂が波打つ頃から、山里の部落に不幸が続出するようになりました。

良太は病気を苦にして納屋で自殺する。

吉造は馬に蹴られて内臓破裂で死ぬ。

姑と意見があわず家を出て行方不明だった娘のかよは水死体で見つかるといった具合で、人々は皆いずれはわが家にも不幸が舞い込むのではないかと不安になってきました。「何のたたりだ」とさわぎ出した頃、アカダモの白蛇のことが口にのぼるようになりました。

「それに違いない。お祓いをするのじゃ」古老の言葉に従って、みんなは、アカダモの木に集まりました。幹に太いしめ縄を巻き、沢山のお供えをし柏手を打ちました。山のてっぺんから里へ向かって塩をまいて家内の安全をお祈りしました。二百十日が過ぎ、祭り太鼓が消えた日の夕方から台風が襲って来ました。人々は家が飛ばされはしないかと心配でまんじりともせずに夜の明けるのを待ちました。風がいくぶん弱まって部落中を見渡すと、どの家もたいした被害はなさそうですが、みんな“あっ”と息をのんで一様に坊主山を指さしました。

アカダモの大木が姿を消しているのです。申し合せたように山のふもとに集まり、風をついて隊列を作って登って行きました。ポッキリ折れた根元に、赤い血のにじんだしめ縄に蛇の抜けがらがからみついて白くゆらいでいました。風が凪ぐと雨になって来ました。その中に身をまるめて白蛇が休んでいます。もう動けないのかも知れません。

「何の因果じゃ」かすかな息づきが最後になりました。

《参考》

むかし坊主山は、志文町にあるいわみざわ公園内の北海道グリーンランド遊園地の大観覧車が建っている辺りにあって、頂上に古い小さな祠が祀られていました。白蛇が住んでいたアカダモの老樹は、その境内に立っていたと伝えられています。

ヤチベコ物語

元次郎は夜中に小便がしたくて掘立小屋を出ました。

中秋の満月から幾日か経っていましたから冷気が肌にささります。

風があるのか熊笹の葉ずれの音がします。用を足して家に入ろうと

するとザァーッという音が遠くから聞こえ、それがこだまとなってまた聞こえます。木が倒れる音でした。その頃は鋸や 鉞 で木を切り開墾しましたが、何尺もある大木は大変な労力を費やしますから、根元の皮を二寸位の深さに削っておきます。栄養を吸うことのできなくなった木はその年に枯れ、二、三年のうちに完全に枯木となり、それを倒して火をつけて燃やします。その枯木の倒れる音を偶然に元次郎は耳にしたのです。しばらく耳を澄ましていました。

その時、突然奇怪な声が森閑とした樹林に響き渡りました。

「バーオー、バーオー」その声は牛の鳴き声に似ています。

「ヤチベコだ」元次郎は身をすぼめました。

「バアホー、マーオー」物悲しく不気味にこだまします。

「ヤチベコが鳴くと、不幸が来る」との言い伝えが残っていますが、夜陰に飛来するものですからまだ姿を見た者はいません。

しばらく元次郎は寒さを忘れ身じろぎもせずその声に聞き入っていましたが、やがて飛び去って行きました。

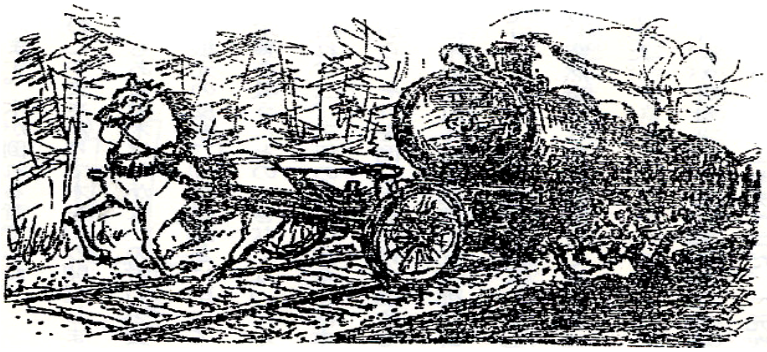
「何か起こらなければよいが」の願いもむなしく、その悪い予感が次の日に的中してしまったのです。仁助はその日の昼から俵につめた豆を馬車に積んで町の雑こく屋に売りに出かけました。思ったよりも高い値がついたものですから家へのみやげをどっさり買い込み、自分もコップ酒を何杯かあおって鼻唄機嫌で馬にゆられていました。

そのうちにすっかり寝込んでしまい鉄道踏切に近づいたのも判りません。林のトンネルをくぐり抜けるように万字行きの列車が急に近づいてきました。

馬はびっくりして向きを左にかえると線路の上を汽車に追われるように走り出しました。仁助は草むらにいきおいよく放り出されました。

「ガラガラ、ガ、ガラガラ」夕暮れの静寂を引きさいたこの異様な物音に、農作業の人々は慄然として線路の方を見やりました。

「ボーッ」と、汽笛を一きわ高く鳴らして汽車は急ブレーキをかけたようでしたが、馬車はふっ飛び馬もかなり引きずられてしまいました。



仁助は打ち身程度でしたが、大事な馬を亡くし、その上汽車の損害弁償などの痛手は大変なものでした。

射げき場物語

昔、冷水の山あいに射げき場がありました。今の万景閣登り道の第一曲折個所を発射地点としてスキー場の南斜面あたりに設けられていた六尺四方の分厚い板の標的に向かって銃で撃つものです。

平時でも戦争に備えて腕をみがいておかねばなりませんから、連日のように鉄砲をかついだ若者が山を登って行き、終日、「ドーン、ドーン」という音がこだましておりました。山のふもとにいる国助も熱心な一人です。国助は熊撃ちの名人だった父の血をついで、やはりこの界わい一の鉄砲の名手で、十発中九発は一尺の円形に命中する実力をもっていました。

昭和十一年(一九三六年)、この地方を中心に陸軍の特別大演習が長時間に亘ってくり広げられることになりました。

天皇が来道するということで、兵士の行動にも熱が入ります。

射げきの天覧大会で有終の美を飾る計画が立てられました。この予選大会が地方毎に三か月程前から行われ、この冷水射げき場からは、やはり国助が圧倒的な強さを発揮して優勝しました。

代表に決まってからの国助は、毎朝まだ暗いうちに山に向かい、朝食前の一時を練習に専念することにしました。もう大会まで幾日もない朝のことです。夜中の雨がうそのように晴れましたが、生い茂る草に残る水滴に下半身をぬらして登って行きました。早速弾を込め、的に向かうと深呼吸をしました。その時、はるか視線を金色に輝いたキツネがよぎりました。「ダーン」キツネは宙を舞うように谷坂をくずれ落ちて行きました。すぐ後をつけて来た子ギツネが樹林から顔を出してきょとんとしています。「しまった！　何の迷いか」国助の背を冷たいものが走り、その場に座り込んでしまいました。

それからの国助は、毎朝太陽にざんげの気持ちをもって手を合わせ、大会までの息災を祈りました。

全道射げき大会は、各地から選び抜かれた百余人の選手によって競われましたが国助は二位になる大健闘でした。

村の名誉と駅前は歓迎の旗がゆれ、歓喜の声がうずまきましたが、国助には優勝を逸したくやしさの中に、あの数日前のおごりとなった行動が微妙に影響したのではないかと思われたということです。

《参考》

・射げき場は、大正八年(一九一九年)に完成し、主に在郷軍人の射げき訓練に使用し、一般にも開放されていました。

・万景閣は昭和四十六年（一九七一年）、『万景閣ラドン温泉』として開業、その後岩見沢観光ホテルとして営業。しかし、平成十年（一九九八年）廃業となり、解体して現在は更地。

・父の国助（国輔）は、もう米寿を迎えようとしておりますが元気です。賞品として貰った大きな柱時計は、家宝となっております。

どぶろく と 駐在

大きなかめの中から茶碗に汲んで飲むどぶろくは、清酒とは一味違った風味で親しまれていました。にごり酒ともよばれるように、むし米にこうじと水を加えてもろみにしたもので、（こしたものが清酒）酒の無い時は冠婚葬祭は勿論のこと、日常のお客にもお茶代わりに勧めました。産婦はこれを飲むと乳の出が良くなり、髪につけるとつやも出ます。村の人はどぶといって、造り方の上手、下手が近所の交際にも影響します。

周作は十代の時に上志文の酒造店に奉公に行っていましたから、この方の年季はかなりのものです。いつも、おいしいどぶを造っているので、飲ん兵えの客の絶えまがありません。巡査駐在所のおまわりも愛好家の一人です。自転車に乗って巡回のつど周作のところへ寄ります。

「おかゆはよく炊けとるか」と言って入って来ます。

「旦那、ちょうど一昨日炊いたのがいい味になっているんで」と大どんぶりに一杯出します。その頃でも酒の自家製造は禁止されていましたから、あまり大ぴらという訳にはいきません。

密造酒をさがすのは税務署の役人です。この動きがあれば事前に駐在は「明日、入るからかくしておけよ」と言って来ます。

周作のところでは、わらにおの奥へ押し込んだり、馬のかいばの中へ入れます。ある夜、この匂いにつられてしゃにむに飛び出した馬が、かめの底まで飲んでしまい二日も腰が立たなかったこともありました。

信三の家では前日留守だったので駐在の話が届いておらず、酒役人が不意に来ました。

信三は、とっさに女房に「かめを抱いて寝れ」と言ってから玄関へ出て行きました。

「どぶは無いだろうな」

「ええ、そんなものは」

「では、見さしてもらうで」

二人がすぐ家の中に入って来ました。

奥の部屋から「うん、うん」うなる声が聞こえます。「女房が、お産なもんで」、と信三が頭をかくと、そそく

さと役人は退散して行きました。嫁をもらう、家の建前だ、お祭りが近い、そんな行事に合わせてどぶを仕込みます。その度に駐在が招待されどんちゃん騒ぎです。

ある日のこと、立ち振るまいの帰り一升瓶に詰めたどぶをおみやげにもらって自転車で駐在所に帰りました。自転車にほどよくゆられて発酵したものですから、どぶは膨張して栓が飛んでしまい、天井に向かって破裂してしまいました。おかげで駐在所の部屋中が真っ白になり、しばらく女房の小言が続きました。

今日は志文の学校の落成式です。校下挙げてのお祝いで、何日も前から周到な準備がなされました。

宴会用のどぶの要請は、当然周作のところです。心魂込めて仕込んだいくつもの桶を馬橇に積んで新教室へ運びました。

手伝いの下戸が匂いにダウンする、てんやわんやの騒ぎです。

宴会の席についた町長をはじめ、偉い来賓諸公もどぶが出てきたので相好をくずしました。駐在もふくみ笑いでコップをあけています。

議員さんが「どぶろく万歳」と大声をあげました。

《参考》

・志文の巡査駐在所は明治三十九年(一九〇六年)に志文本町三条二丁目の旧国道沿いに置かれたが、平成四年(一九九二年)十一月八日、志文町三二四番地に移設し現在に至っている。

八千代座物語

室蘭線が開通し停車場が建てられると、志文の市街も急に活気をおびてきました。さらに、この街をにぎわいのあるところに変えたのは、美流渡の山奥から木材を運ぶ馬車鉄道が敷かれたからでした。

人馬の往来が一段と激しくなってくると、これを目当てにいろんな商売が進出してきます。芝居と映画を見せる八千代座ができたのもまもなくです。

この八千代座を建てたのは、岩見沢で大きな料理屋をやっていた杉本弥太郎という人で、百畳敷の観覧席をもつ、近代まれにみる豪華なものでした。

夕方になるとジンタの一行がマーチを吹奏して景気をあおります。娯楽の少ないのとめずらしさがあいまって、近郊からも押しかけ、金持ちの人を乗せた人力車も見かけます。映画芝居の木戸銭は十銭で、

下足番にはき物をあずけ貸ぶとんが三銭、冬場は小さな火鉢を五、六人で一つ十五銭で借ります。湯タンポの貸し出しもあり、映画の幕間には、「ええ …… おせんにあんぱん」の立売りがあります。

火鉢でするめやいわしを焼いて一杯チビリ、チビリやりながらの見物です。その頃の映画は無声ですので、映りだされた俳優の動きにあわせて活弁士が説明していきます。二時間位のものを一人でするのですからかなりの声量がないともちませんし、弁士の上手下手が入場客の多少に影響がありましたから、週二回位の出演でも弁士の月給は三百五十円位で、道庁の役人よりも良かったと思います。

当時の収入ランクは、「一に山かせぎ、二に力士、三は大工、四は官員(役人)」といわれていたほどでした。この金取りのよい労働者が、連夜志文の市街をかっ歩したのですから、その喧騒さを知ることができます。芝居が終り観客が帰った後、舞台の上や下に花(祝儀)として投げられた五銭、十銭が散らかり、箒ではき集めてちり取ですくい、柳ごうりに投げ入れるほどの景気の日もあったのです。

弥太郎の家族はみな病弱で、かみさんも若死にし、女の子ばかりの三人姉妹も二人が亡くなり末娘の花代と二人です。

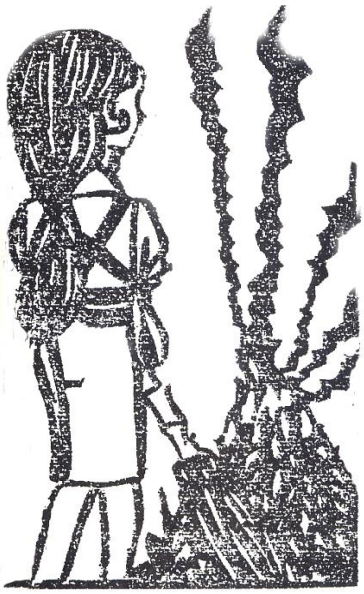
花代は小さい時から苦労はしていますが、絶えず愛嬌を浮かべて暗い影がみじんもありません。父の弥太郎の旺盛な事業欲を助けて、掃除をしたり木戸番をしたり、よく働くものですから若者のあこがれの的でした。もう年頃になりましたから、弥太郎はいずれむこを迎えたいものと思っていました。

ある年、ドサ廻りの任侠芝居の一座がやってきました。

連日拍手かっさいを受ける好評故に、長時間滞在して興行を続けておりました。その一座の中に正次という年若い役者がいたのです。

彼は三枚目役に似ず物静かな真面目なところがあるものですから、みんなの信望もあります。いつしか花代はこの正次に心ひかれるものを感じるようになりました。正次もまた、花代との語らいがとても楽しいものとなっていました。しかし、正次には内地に妻子のいることを知った弥太郎は一座の親方と話して、急に夕張の興行に移らすことにしました。出立の汽車が鉄橋を渡る頃、花代はそっと幌向川の橋のたもとで見送っていました。

しばらく元気そうにふる舞っていた花代でしたが結核にかかり、療養むなしく不帰の客となったのは、旅役者との悲恋から一年もたたずのことでした。最愛の花代を失った弥太郎の落胆ぶりは、はた目にも気の毒なほどでしたが、この頃から万字線の建設が急ピッチで進み、馬鉄の撤去が時間の問題となり、八千代座



の経営にもかげりが見え始めていました。

《参考》

・八千代座のあった場所は、現在の志文本町、静雲寺の近くです。

・八千代座の八は、弥太郎の弥が用いられていました。

金志貯水池物語

きんしちょすいち

「そうだなあ。今夜は金志の溜池の話をして聞かせるべ」そう言ってお爺さんは、キセルの煙草をポンと手のひらに吹き落としました。

わしら内地から来た頃は土地も肥えていたし、虫や病気も少なかったから、畑に何を播いてもよう育ったもんだ。だがのう、掘立小屋の笹ぶきの間から星を眺めて思うことは、内地のなつかしさと、いつになったら腹一杯白いメシが喰えるかというくらいに米が欲しかったもんよ。買った米は貴重品、正月と盆の二回しかご飯は食べられんし、たまあに病気した時に、米粒が数えられるようなおかゆだ。その頃はまだ道庁では米作りは危険だといって許さない。だが、方々でかくれて米作りを試みる者が出てきた。家でもうらに池を掘って雨や雪の溜まり水を風車で汲み上げて、一反前後作ってみると一俵ほど穫れたものよ。反面、年ごとに畑がやせてきてとれなくなるし、虫も増えてきた。そうこうしているうちに、道庁でも水田作りに本腰を入れるようになり、あちこちで川水を利用して田んぼを造りだした。

そうだなあ、あれはたしか土功組合法が作られた時だと思うが、「志文川をせき止めて溜池を作ったら」の話がにわかに持ち上がって、「わしら百姓の生きる道は水田を作るしかないべ」との結論になると何んだかんだのむずかしい役所の方の手続きもあったが、それが済むと早いもんよ。百人近い赤いフンドシのタコを使い、五、六人の看視役の棒頭を雇って一年半で完成させたのは見事だった。

次の年の春、満水に溜まった水が、水路を流れて来た時は感激で幾晩も幾晩も眠れなかったのお。この水で今まで赤い泥炭水や鉄気のくさい水を飲んでおった金子、志文の何軒かが助かったし、造田も急速に進んだっけ。そうそう、この溜池にまつわるいろんな話もあるんで、ついでに聞かせるかのう。

お爺さんはキセルをくわえ気持ちよさそうに煙草を吸うと、思い出すように眼を閉じてゆっくり煙をはき出し、また話し始めました。

もともと、この沢の奥に四、五軒が住んでおり、畑作りと炭焼きをしておった。ここから子どもらは一里以上を学校へ通ったもんだ。

冬は溜池に五～六尺の厚さの氷が張るもんだから、この上を近道にした。ある時、吉助爺が町へ買い物に出かけ、どっさり食べ物を背負いちょっと一ぱい機嫌でこの凍てつく近道を帰ろうとした。けどなあ、いくら歩いても歩いても家へつくことができんのじゃ。池の周りをぐるぐる回っておったんだな。やがて爺はきつねにばかされたと知った。

それで背負った荷物の中から油揚げを一枚ポーンと投げてやると、とたんに家がボーッと見えてきたというんだな。

それから何年か経って、この溜池にも魚が棲むようになった。仕事の合間に魚つりをする者が増えてきたのじゃ。ある夏の真っ盛りの日、四、五人の若者が魚つりに来たが、あまりの暑さにふりチンで池に飛び込み泳ぎを楽しんでいた……と、その中の一人が急に沈んでいった。

部落中大さわぎとなって、いかだを組みいかりを投げて引き上げたが、きっと心臓マヒだったのだろう。この男は道路の測量技師とかいって内地から一人で出稼ぎに来ておったというこっちゃが、水泳禁止をとがめた水神が、そのみせしめに池の底に引きずり込んだとの、うがった話も出たもんよ。さあて、その年の暮また変なことが起きた。

前日からの猛吹雪で人も犬も一歩も外へ出ることができない。

ちょうど溜池の入口に水番の家があったが、そこのかみさん、夕方何の気なしに窓の雪を手でこすって外を見ると、今し方ついた藁靴の跡が見えるではないか。早速おやじさんと出て見ると、八の字の跡が溜池の方へ向かっている。たどたどしい跡をつけていくと、放水路の口のぶどうづるの下に赤い角巻を着て、うずくまっている若い女を見つけたのじゃ。凍死寸前で助かったのだが、正気づいてその水番夫婦に語ったのは、「岩見沢の遊郭へ売られて働いていたが、耐え切れず自殺しようとさまよっていた。そのうち足が何かにひかれるようにこちらに向いた。勿論貯水池などあることは全然知らなかった」というんだから、さては夏に水死した若者の霊が呼び寄せたのではないかとのうわさも出たほどだ。お何だか怪談めいた話になってしもうたわい。

そう言ってお爺さんは、冷たくなったお茶をゴクリとうまそうに飲むのでした。外はこの話のときと同じようにヒユーヒユーと風がなって吹雪いています。

このことのあった翌年の春、雪解けを待って神主をよんでお祓いをし、水神を祀る祠を建ててお祭りをするようになりました。

近年、金志貯水池も自然公園のハイキングコースに組み入れられ満水面積十町歩（約九、九ヘクタール）の広さをもつその景勝とうっそうたる森林に囲まれた神秘なたたずまいに、訪れる人は魅了されています。

とんでんかいたく　へいたいばあ

屯田開拓と兵隊婆さん

開拓初期の北海道は、植民地行政で、内地府県と異なった制度で待遇を受けていました。兵役を国民の義務とした憲法から徴兵令も適用除外地区として免除し、働き盛りの若者を開墾労働に専念させるようにしました。そのうちに北国を外敵から守ることと、開拓の一石二鳥をもくろんだ屯田兵条例が作られました。平時は農耕に従事し、戦時には武器をとって軍務につく使命をもつものです。

家族には移住費、家屋、農具、耕地、そして三年か五年の食費が与えられるものでした。本州では土地の面積に限りがあり、農作物も安く地租を納入できず、次男、三男は失業状態という背景がありましたから、この屯田兵募集の広告に殺到したことが容易にうなづけます。対外政情は風雲急を告げ、日本は清国に対して宣戦布告しました。

日清談判破裂して、
品川乗り出す吾妻艦、
つづいて金剛浪速艦
……

維新後、最初の外国との戦争で打倒清国の敵がい心をあおったこの歌が一世をふうびし、戦時色一色に人心を塗り替えました。

この局面に屯田兵にも旭川の第七師団へ集結動員令が下されたのはいうまでもありません。米吉一家が最初に入った沼貝（現美唄市）の屯田兵村は、すごい泥炭地で水はけが悪く、来る年も次の年も作物は満足に育たず苦労の割に報われることが少なかったものですから、どこかに良い土地をと考えていました。

三年の現役、四年の予備役の任務が終わった春に、息子の定吉も立派な後継者として育っていましたから、思い切って同郷の人が住む下志文の土地に移住することにしました。

幌向川の流域の肥沃なところで何をまいても良く穫れます。

日清戦争勝利の終結以来、日本はロシアと満州の権利を獲得するため外交交渉を行っていましたが、双方の利害は平行線をたどって妥協点を見い出すことができず、ついに日露戦争へと発展してしまいました。定吉をはじめ多くの若者に、『赤紙』と呼ばれる召集令状がきました。歓呼の声に送られて志文の停車場から戦地の満州に向かって出立します。中には妻子を残して別れる者もいます。

定吉の出征の朝、祖母のサダは千人針の日の丸を腹に巻いてやり

ながら、「決して後のことは心配するでないぞ。みんなで畑を守り抜くでな」

その声は凛然としておりました。

サダは内地に居た若いころ、男達と角力をとっても負けないというエピソードをもつ女丈夫で、いまだその片鱗を失っていませんから、定吉の分も引き受けて仕事に精を出します。

出征兵士の見送りには、誰彼の区別なく必ず出向いて激励するならわしになりましたし、農作業の合間には留守宅を訪問し世話をします。戦地の兵隊さんに間断なく慰問品を送り続けたり、役場を通して何度もお金を寄附しました。

誰いうとなくサダのことを『兵隊婆さん』と呼ぶようになりまた。

『銃後の鑑だ』と兵隊婆さんの行為が評判になっているころ、満州では日本軍の快進撃が続いておりました。

定吉の旅順二〇三高地での戦死報告がもたらされたのは、桃の節句を間近にしてのころでした。

志文駅

追い松物語

今朝も早くから、一人のおじいちゃんがガチャガチャ棒で排水溝をつき、「ほう、ほう」といいながら、どじょうを追っています。バケツの横には、あいかわらず焼酎の入った一升びんが置かれています。

ふらつきながら網を上げると、沢山のどじょうがピチピチと朝日にきらめき、ひどじょう(赤どじょう)も何匹かいます。

このおじいさんの本当の名は誰もはっきりわかりませんが、みんなは「追い松」あるいは「追い松っあん」と呼んでいました。姓の一字に松の字があり毎日どじょうを追っているので、こんな呼び名になったのでしょう。まだそんな年ではありませんが、ふけて見え格好はまるで年寄りです。酒好きの彼は、どじょうを売っては酒にかえて飲んでいます。

学校へ行く子どもたちが、道ばたの草の中で酔っぱらって寝ている姿を見かけ、「追い松っあん、どじょうがみんな逃げちゃうぞ」

「追い松じいちゃん、蚊に喰われるぞ」と言って通ってもびくともしま

せん。昼過ぎその子どもたちが学校帰り、まだ酔っています。

彼は、「おれは万字線を作った」が唯一の自慢の口ぐせでした。事実、彼は万字線路を敷設する時の土工夫でしたが、これが完成すると、もう土方をする気がなくなりました。もともと働いただけ飲んでしまうたちですから、早くに妻子に逃げられ、一人ぼっちですから気楽なものです。土方の飯場が次の現場へ移動になっても、彼は小さな小屋を駅の裏側に建てて住みつきました。寝る時は、農家からもらった古い長持ちの中に入って、わらにくるまって寝ますのでふとんもありません。その頃から、この辺は今までの畑が水田に変わってきました。

用水路が通り、排水溝に水があふれ、沢山の魚が泳ぐようになったのです。追い松は、このどじょうに目をつけました。根気よくとると、かなりのお金になりました。

彼はバクチは好きなんですが、未だ勝った事がありません。いつも、みんなのかもにされます。彼はどうもしゃくです。ある日どじょうをふところに入れて出向きました。あんのじょう負けこんだころあいをみて、「おっ、そこにねずみが走ったぞ」追い松がとんきょうな声をあげました。みんな、指さす方に目を向けると、彼は一匹のどじょうを座ぶとんの上に出しました。

「ねずみなんかおらんぞ」ガヤガヤいいながら、みんなが視線をもとにもどすと、太いどじょうが花札の上を、のたうちまわっています。

「追い松か、このどじょうは」

大さわぎですが、だれも手を出しません。

「そんなら、今日、ふんどしにもぐり込んだやつかも知れんな。ヘッヘッヘッ……」

しゃーしゃーとして、そのどじょうを

つかみ上げると、一息に頭の方からスポーンと飲み込んでしまいました。みんな、あっけにとられていました。

その夜のバクチはこれでお開きになりました。

冷水墓地物語

開拓が進むにつれて、この地に定着する人が増えてきました。

生者必滅のならいで、不幸がつきものですから、この死者を葬る墓地の必要を感じるようになりました。有志が相談し候補地として目をつけたのが冷水の国有林です。早速代表二人が戸長役場を通じ国有林貸与願を道庁に陳情し、共同墓地として使用することになりました。その頃は、土葬もたまたまありましたが、ほとんどは野天焼きでしたから、野辺のおくりがすむと手伝いの近所の人は、乾いた薪を持って墓地へ行き、ごぼんの形に高く積み上げ、棺をその上に寝

かせ、石油をかけて火をつけます。

薪の燃え方によって、死人が棺からころがって落ちたり、風の強い時は燃料がすぐ無くなってしまうなどとても大変です。

それに長い時間かかるものですから、気の強い男たちが酒をちびちび飲みながら番をするのです。その後、火葬場が建てられレンガの釜で焼くようになりましたが、こんな話があります。

この火葬場の建築にとても熱心だった発起人の伍太郎、兵蔵の二翁は、人の世話も進んでする信望の厚い人でしたので、住民からの寄附もとんとん拍子に集まり、意外に早く完成することができました。

ところが、落成して間もなくこの筆頭者の伍太郎が急死し、第一号として火炉を使用することになったのです。

それから何日か経って、今度は二番手に兵蔵が亡くなってしまいました。二人共かなり年をとっていたのと、一つの事業を成した安堵で死期を早め、偶然に続いたのだとも思えるのですが、まか不思議なこととしてしばらく住民の尾ひれをつけた怪談として残っていたということです。今のように専門の墓地や火葬場の管理人がいなかったので、不幸の無い年はめったに人の訪れる事も少なく、年に一度のお盆にお墓参りを兼ねて掃除をしておきます。

ある年の夏、この墓地に馬の草を刈りに行った次吉は、火葬場の中に人の気配を感じ中をのぞいてみました。釜のところでうずくまっている者がおります。

「誰だ！」次吉は鎌を手にして戸を開けました。

全身真っ黒で眼だけ異様に光らせたその男は、声の方を見据えながら少し後ずさりしたようでしたが、次吉の野良着姿を確認したのか、「ハブ、ハブ」(ご飯)とうめくように言って、手を口のところへ持って行きました。次吉にはぴんときました。

朝鮮人の炭鉱労働者が逃げて来て、空腹で動けず半死半生でかくれていたのです。次吉は逃亡者に対する監視人の仕打ちの恐ろしさを、充分知っていましたから、暗くなるのを待って家へ連れて帰りました。

女房や子どもにも因果を含めてかくまうことにしました。

口もきけない程に弱っていた男も、毎日一升ものご飯を平らげると、徐々に元気を回復して片言の日本語と身振りで次のようなことがわかってきました。

朝鮮の国から半ば強制的に北海道に連れてこられた何千人の労働者は、全部炭鉱に向けられました。それだけ石炭の必要な時にあったのです。彼は万字の山に来たが、仲間は全部危険な切羽にもぐらされました。朝は三時から夜七時迄、食事は麦めしで生味噌がおかず、給料は一日一円三十銭、食費は七十銭で足袋や下着が、四、五日しかもたないから、働くだけ借金が増えます。小さい一室に三人入れられ、外にピストルとこん棒を持った見張りが何人も交替で立って

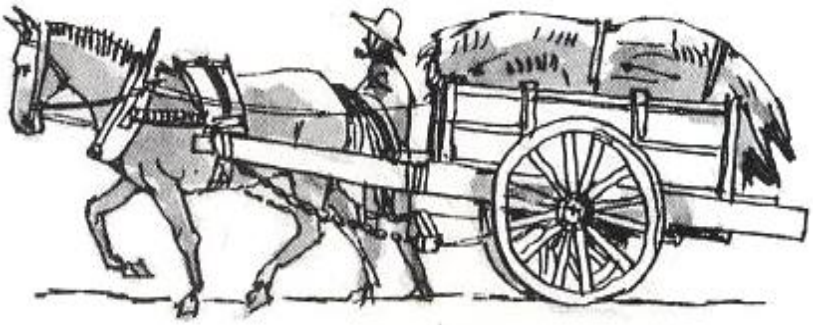
います。少しでも疲れた様子をするとスコップでなぐられ活を入れられます。栄養失調と重労働で死人が続出しました。逃げて見つかれば半殺しに合います。だが彼は仲間五人と覚悟を決めて山づたいに逃げ出したが監視がきびしく、朝日のあたりでばらばらになってしまったとのことでした。一週間程経って、日高で木工場をやっている次吉の姉から返事の手紙がきました。

一人や二人なら是非すぐにでも使いたいとのことです。真面目そうなその若者を遠くへ逃がしてやろうと、問い合わせのハガキを出しておいたのです。逃亡者をさがす監視たちが自転車で山路を往来するようになりましたから、一刻の猶予も許されません。次吉は馬車にわらを積んで彼をもぐらせました。

闇の中から「アリガト、アリガト」という声がかすかにもれていました。

《参考》

・冷水墓地は、現在の緑が丘霊園です。



野鍛冶と突きホー

明治も中頃になると岩見沢もさらに開拓が進み、この地方の中心となり、教育をはじめ農業、商業が盛んなまちになってきました。

農家では野鍛冶と相談して農機具を使いやすく改良したり、新しい農具を考えたりしました。しかし、時には便利に思って作っても、いざ使ってみるとかえって不便なものもありました。軽くて使い易く能率がよくなるようにすると故障が起きやすい欠点があったり、丈夫にすると重くてとても使用できないこともありました。

この地開拓の祖辻村直四郎さんが、進取の気概をもってアメリカへ渡り、五か年に亘り欧米農業の研修を重ねて帰道しました。

直四郎さんは帰道した時に、非常に簡単なつくりで手軽な除草器具を持ってきました。うすい長方形の鉄板に細長い柄をつけたもので、前の方に刃がついているので押してやれば作物のうねの間に生えている雑草をその刃で切り取れるのです。直四郎さんが畑を歩きながらこの農具で草を切っていると、手を振るように押したり引いたりしていることに気がつき、後ろの方にも刃をつけると引いた時も切ることができることに気が付きました。

しかし、これではせっかく切った草がそのまま畑に倒れて残るので、あとで熊手かホークで集めなければなりません。そこで鉄板の上に鬼の角のような二本の鉄棒を立てて、切り倒した雑草をそれに引っかけることを考えました。直四郎さんはこの農具を考えたように作り替えて、この地方の土質に合ったように改良することを野鍛冶の君島義八郎さんに相談しました。

義八郎さんは野鍛冶をしていますが、もとは君島義八郎藤原義次という銘をもつ太田藩の刀鍛冶でした。明治維新前までは武士は必ず帯刀し、農工商の職業の者も地位によって一刀をたずさえることができましたが、明治九年廃刀令によって軍人警官以外は全面禁止になり、先祖代々刀かじを天職としていた義八郎さんも転職せざるを得ません。帯刀を許されていた刀剣師の君島一家がこの地に来て永住を心に決めたころは、かなり開墾が進み中心地では雑多な職業が自然に秩序ある配分で、こじんまりと市街を形成していました。扱う品ももっぱら農具にしぼり、野鍛冶となってその技術を生かそうと志文に落ち着いたのです。そのころ鍛冶で作る農耕用具は人の手に持って使う物がほとんどです。志文には野鍛冶が二軒ありましたが、これら農具の作製や修理で大忙しです。義八郎さんも弟子を四、五人使い、朝の暗いうちから真っ赤に焼いた鉄を打ち合います。

「ホウー」と一人が大ハンマーで打てば「ハウー」と持ち手が小ハンマーで気合をかけます。

「ホウー、ハウ、ホウ、ハウ」の掛声と、「トーン、テーン、トーン、テーン」と終日活気ある響きがこだましました。

義八郎さんは多くの新しい農具を作り、鍬や鎌は一段と立派で切れ味も良く、さすが昔とった何とやらでひっぱり凧でした。その後欧米から、馬に引かすプラウやハローなどが入ってきましたが、当時の馬では力が弱く耕作に不自由でしたので、農家の人と相談しながら実際に自分も使って納得いくように小形に作り替えたり、泥炭地用と真土用に分けて使うように二通りに作り替えたりしました。便利なように見えても、いざ使ってみるとあちこち不具合な面も出てきます。義八郎さんは弟子が眠った後も一人で起き出して、あれこれ考えることもありました。

直四郎さんから相談を受けた義八郎さんは、「後ろ側にも刃をつけることはよい方法であろう」と言いました。また、刃をつけるのだから少し丸みをつけることと、地面につく方は反対に少し反らすといっそう切れ味がよいことなどを考えました。そして、刀と同じような鋭

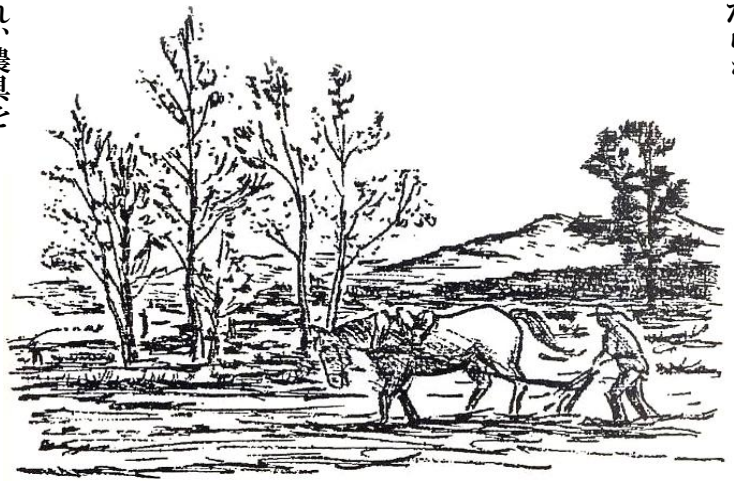
い刃のつくように鉄を鍛え、前後左右に刃をつけ、直四郎さんが考えたように上に二本の角状の鉄棒をつけた『突きホー』を作ったのです。

実際に使ってみると、押しても引いても誠に気持ちよく雑草が切れるのです。そして切り倒された雑草が二本のつめに引っかかって落ちず、切れない雑草もこの二本のつめに引っかかって根こそぎ取れるので、土を払って枯れやすいように工夫しました。二人は手を打って喜びました。そして、「この農具をたくさん作って、多くの人に楽に仕事をしてもらおうではないか」ということになりました。これは直四郎さんが新たに考えた方法で、新案特許をとって『赤鼻天狗印』の商標をつけ、『辻村突きホー』として売り出すことになりました。直四郎さんは無償で一切の権利を義八郎さんに譲り、譲られた義八郎さんは立派な農具として安い値段で売り出したので志文の君島農具工場のものが最上といわれて、多くの農家は感謝して使ったといいます。麦やえん麦の草を取るにはもってこいで、今までの何倍の能率が上がりますから、農家が押しかけうばいあいの状態です。道内はもとより内地からも注文が殺到し製造が間に合いません。冬場の少し暇な時は、この突きホーを大量に作ってペンキをぬって長もちの中に並べておきますが、春になるとたちまち売れて無くなってしまいました。こんな簡単な農具ができるまでにも、みんなが色々と工夫し苦労をしたものでした。

突きホー

義八郎さんは、刀剣師として銘をもつほどの地位にあった人ですから、学問もあり晩年詠んだ次の歌からも、その気骨振りが想像されます。

日に三度　手に採る箸の
束の間も
　我忘れめや　大和魂
君嶋の　草木は風に
　とばされて
　おちる木の葉は
　大嶋の土



《参考》

・野鍛冶とは、『土鍛冶』ともいわれ、農具を主として作るところで、現在の農機具工場に当たります。

・辻村直四郎さんは、辻村農場を開き志文という地名の名付け親でもあります。また、町会議員のほか農会長など多くの公職につかれ、岩見沢のために尽くされました。